

同時双方向型遠隔授業の推進を支援する研究

ー遠隔授業推進パッケージ「えんかくいろは」の開発とその活用を通してー

〈教育の情報化研究グループ〉

東 洋太郎¹、佐々木 博史²、尾形 祥平³、氏家 裕⁴、齋藤 秀峰⁴、千坂 大輔⁴
利府町立利府小学校¹、石巻市立河南東中学校²、宮城県松島高等学校³、宮城県総合教育センター⁴

〔要約〕 遠隔教育に関する国や県の方針では、遠隔教育システムを効果的に活用し、教育の機会均等や児童生徒の学習機会を確保し、平常時から非常時に備えることが求められている。また、高等学校では単位修得が可能となった。しかし、宮城県の教員を対象に実施した実態調査から、遠隔教育への期待が高い一方で、同時双方向型遠隔授業の実施率が低いことが分かった。そこで、遠隔授業推進パッケージ「えんかくいろは」を開発し、その活用を通じて同時双方向型遠隔授業の推進を支援することを目指した。

〔キーワード〕 遠隔授業 遠隔教育 同時双方向型 情報活用能力 学習機会

1 はじめに

「義務教育段階における質の高い教育の実現に向けた遠隔教育の活用について（通知）」¹⁾及び「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」²⁾では、オンラインの活用は、教師の指導や児童生徒の学びの幅を広げること、特別な配慮や支援が必要な児童生徒の学習機会の確保を図るという観点から重要であることが示されている。また、遠隔教育の推進に向けたタスクフォースの「遠隔教育の推進に向けた施策方針」³⁾では、同時双方向型の遠隔授業は、教育の質の更なる向上につなげることが可能であり、継続して推進すべきと記されている。また、「感染症や災害の発生等の非常時にやむを得ず学校に登校できない児童生徒の学習指導について（通知）」⁴⁾では、非常時に児童生徒が学校に登校できない場合などには、同時双方向型のオンライン会議システムを活用し、学習指導と学習状況の把握を行うことが重要であると示されており、加えて、平常時から非常時を想定した備えをしておくことの重要性が記されている。「高等学校等における多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現について（通知）」⁵⁾では、令和6年4月から同時双方向型遠隔授業を導入し、最大36単位まで単位修得が可能とする旨がまとめられている。

「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」⁶⁾では、宮城県の長期欠席者数の割合は、小・中学校及び高等学校において、全国と比較すると高い現状が示されている。さらに、毎年、感染症等に伴う学級・学年閉鎖や臨時休業などの措置が講じられている現状を踏まえると、非常時に備え、児童生徒の学習機会を保障する遠隔教育の必要性は極めて高いと考える。

宮城県では、「第2期宮城県教育振興基本計画（改訂版）～志を育み、明るい未来の創造へ～」⁷⁾において、「教育DXの推進」による学びの変革が掲げられている。その具体的な取組の1つに「遠隔授業の実施」が示されている。

このことから、本研究では同時双方向型遠隔授業を推進するための手立てを探ることとした。

2 同時双方向型遠隔授業について

文部科学省が公表した「遠隔教育システム活用ガイドブック第3版」⁸⁾には、同時双方向型遠隔授業とは、「学校から離れた空間へ、インターネット等のメディアを利用して、リアルタイムで授業配信を行うとともに、質疑応答等の双方向のやりとりを行うことが可能な方式」とされている。また、「遠隔教育」と「遠隔授業」については、表1のように示されている。

表1 遠隔教育と遠隔授業の言葉の定義

遠隔教育	遠隔教育システムを活用した同時双方向型で行う教育のこと
遠隔授業	遠隔教育のうち授業で遠隔教育システムを使うもののこと

以上から、遠隔授業は同時双方向型で実施するものと定義されていることが分かる。

本研究では、学校現場に、この定義は十分に浸透していないと推察し、遠隔授業を、必要に応じて「同時双方向型」「一方向型」「オンデマンド型」の3種類に分類した。

3 遠隔授業に関する実態調査

(1) 実態調査アンケート

① 目的

宮城県内の学校における、遠隔授業に関する実態を把握するために、県内の教員を対象に実態調査を行った。

② 調査方法

調査対象は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員とし、宮城県総合教育センターにおける研修会の参加者や本研究グループ研修員の所属校に依頼した。

- ・調査期間：令和6年6月12日～7月31日
- ・有効回答数：380（内訳：小学校106、中学校90、高等学校163、特別支援学校21）
- ・オンラインアンケートフォームによるアンケート調査

③ 調査結果

ア 遠隔授業に対する期待感

宮城県の教員が持つ遠隔授業への期待感について、「遠隔教育システム活用ガイドブック第3版」⁷⁾で示されている「遠隔教育の分類」に基づいて調査した（図1）。その結果、「不登校や病気療養で教室に入れない児童生徒を支援する個々の児童生徒の状況に応じた遠隔教育」が72.6%、非常時などに学校と家庭をつないで学習支援を行う「家庭学習を支援する遠隔・オンライン学習」が62.1%、「多様な人々とのつながりを実現する遠隔教育」が53.7%、「教科等の学びを深める遠隔教育」は43.2%であった。「遠隔授業に期待していない」と回答した教員は1.3%であった。新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、必要性が高まった遠隔授業だが、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行した後も、教員の遠隔授業に対する期待感が大きいことが読み取れる。

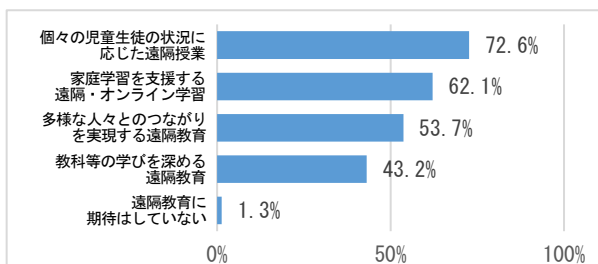


図1 遠隔授業への期待感について (n=380)

イ 遠隔授業の実施経験

遠隔授業の実施経験とその形式について調査した。

なお、遠隔授業の実施形式は3種類（同時双方向型・一方向型・オンデマンド型）に分類し、調査した。その結果、同時双方向型を選択した教員は19.7%で、全体の2割弱であった（図2）。

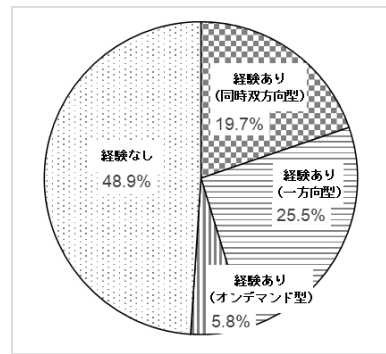


図2 遠隔授業の実施経験について（回答数 n=380）

さらに、「遠隔授業の実施経験がある」と回答した教員を対象に、現在の実施頻度について「遠隔教育の分類ごと」に調査した。その結果、どの分類においても「実施したことがない」が最も多く、次いで「過去に1回」や「過去に数回程度」が多かった。遠隔授業を「毎日」または「週に2、3回程度」実施している教員は全体の4.5%で、遠隔授業を日常的に実施している教員は少数であることが分かった（図3～5）。

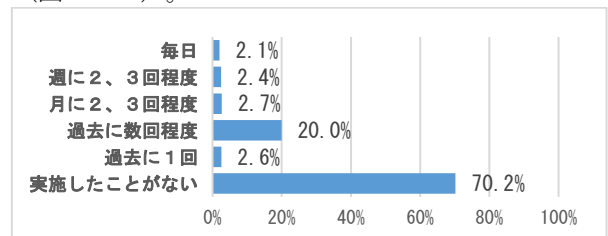


図3 個々の児童生徒の状況に応じた遠隔教育の実施頻度について (n=194)

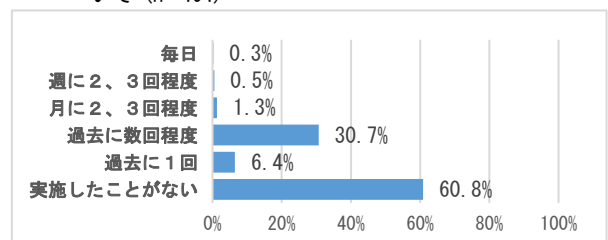


図4 多様な人々とのつながりを実現する遠隔教育の実施頻度について (n=194)

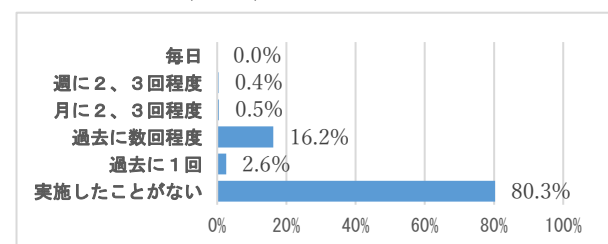


図5 教科等の学びを深める遠隔教育の実施頻度について (n=194)

ウ 遠隔授業の課題

遠隔授業を実施する上での課題について調査した（図6）。その結果、多くの教員は「業務が多忙であること」「教員の情報活用能力が低いこと」に課題を抱えていることが分かった。自由記述から、業務が多忙であることについては、「遠隔授業を行うことにより多忙化に拍車がかかる」「ICTが得意な先生の負担が大きくなる」「現在の授業や校務で

手一杯」という記載があった。教員の情報活用能力の不足については「機器操作の習得から始める必要がある」「遠隔授業を行うことに不安がある」「遠隔授業を行うためのマニュアルが欲しい」という記載があった。

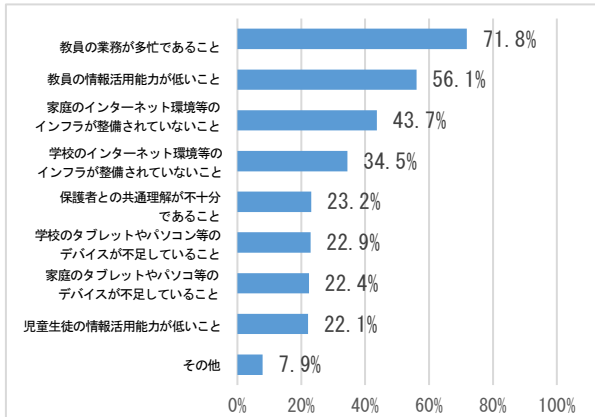


図6 遠隔授業を実施する上での課題について (n=380)

※複数選択可

エ 遠隔授業に関する校内研修の実施状況

所属校における遠隔授業に関する校内研修の実施の有無について調査した。その結果、「実施したことがある」は35.5%、「実施したことがない」は64.5%で、6割以上の学校で遠隔授業に関する校内研修が実施されていないことが分かった。

4 遠隔授業に関する現地調査

(1) 本研究との関連

本県では、入院生徒に対する教育保障体制整備事業や教育DX推進プロジェクト事業などを通じて、遠隔授業の強みを積極的に生かし、児童生徒の支援に役立てている。すでに遠隔授業を実施している学校現場を視察し、担当者と情報交換を行うことで、研究の精度をさらに高め、現場のニーズを反映した成果物を作成することができると考えた。

(2) 入院している高校生への学習支援事業に関する現地調査

① 現地調査の目的

「入院している高校生への学習支援事業」において、遠隔授業を実施した際の成果や課題を把握するために、現地調査を行った。

② 現地調査から

医教連携コーディネーターを通じて、入院中の生徒を対象とした遠隔授業による学習支援に関する成果や課題について、生徒、保護者、学校現場からの意見を収集することができた。それらの意見には、遠隔授業に関する課題や改善が必要な点が多く含まれており、研究の方向性が適切であることを確認することができた（表2）。

表2 遠隔授業による学習支援の成果や課題（○成果、●課題）

生徒	○遠隔授業を受けることで、学業への不安を解消することができた。 ●音声が届かない、板書が見えにくい、画面外で何をしているのか分からない。
保護者	●遠隔授業を始めることは、簡単ではないことが分かった。 ●もっと早い段階から開始できてほしい。
学校	●初めての遠隔授業へのハードルが高い。 ●校内体制を整える必要がある。

(3) 教育DX推進プロジェクト事業に関する現地調査

① 現地調査の目的

「教育DX推進プロジェクト事業」において、遠隔授業を実施した際の成果や課題及びその解決に向けての知見を得るために、現地調査を行った。

② 現地調査から

専門性の高い授業を配信することで児童生徒の学習機会が確保され、特に受信校でのメリットが大きかった。授業担当者は、質の高い同時双方向型遠隔授業を目指し、授業の展開や教材の工夫をしていた。遠隔授業を始めた当初は、遠隔授業や機材に関する教員の知識や技術が不足しており、苦勞したという声があり、そのような場面で学校現場の助けとなるものが必要であると感じた。

5 研究目標について

(1) 研究目標

同時双方向型遠隔授業を推進するための支援手法の確立

(2) 研究目標を達成するために必要な視点

視点①短時間で遠隔授業の必要性について教員間で共通理解できる

視点②短時間で同時双方向型遠隔授業に必要な知識や技術を知ることができる

(3) 本研究で目指す教員の姿

遠隔教育の必要性を理解し、必要な時に同時双方向型遠隔授業ができること。

6 遠隔授業推進パッケージ「えんかくいろは」の概要

遠隔教育に関する背景や実態を踏まえ、学校現場の教員が遠隔教育の必要性を理解し、同時双方向型遠隔授業に必要な知識や技術を知るために、「遠隔授業推進パッケージ『えんかくいろは』」（以下、「えんかくいろは」）を開発した。「えんかくいろは」はWebサイト上に構築する。「えんかくいろは」は、「えんかく事典」と「研修いろは」の2つのコンテンツで構成される。なお、Webサイトは、本研究の対象である教員に加え、児童生徒、保護者が活用することを想定している。その理由は、同時双方向型遠隔授業を成立させるためには、児童生徒も遠隔授業に関する知識や技術を知り、必要に応じて保

護者のサポートが必要だと考えたためである。これらのコンテンツの活用を通して、同時双方向型遠隔授業の推進を支援する。なお、「えんかくいろは」が想定する遠隔授業の形態は、「オンライン会議システムを用いた一斉授業」「対面授業と遠隔授業を組み合わせたハイブリット授業」「オンライン会議システムを用いた個別授業」である。

(1) えんかく事典の概要

短時間で、同時双方向型遠隔授業に必要な知識や技術を知ることができる動画集である。動画は「これから遠隔授業を始める先生向け」「ステップアップを目指す先生向け」「更に極めたい先生向け」の3段階に分類した。

① 特徴1「短くて分かりやすい動画集」

動画は、学校現場で実際に起こり得る出来事を想定し、同時双方向型遠隔授業を行う際に必要な知識や技術、要領などを知ることができる内容となっている。それぞれの動画は、短時間で視聴することができる。動画終盤の「今日のまとめ」では、動画の要点を分かりやすくまとめている。また、動画は、タブレット端末等で複数のアプリケーションを同時に使用し、画面上に並べて利用することや、スマートフォンなど様々な媒体で視聴することを想定し、縦型（9：16のアスペクト比）で作成した。

② 特徴2「児童生徒、教員、保護者が視聴可能」

同時双方向型遠隔授業を成立させるためには、児童生徒や、サポートする保護者が遠隔授業に関する知識や技術を知る必要がある。そのため、動画は児童生徒の目線で作成することで、教員が授業などで活用するだけでなく、児童生徒や保護者が家庭で視聴し、遠隔授業に必要な知識や技術などを知ることができる。

(2) 研修いろはの概要

短時間で教員が同時双方向型遠隔授業についての知識や技術を知ることができる研修コンテンツである。動画を視聴したり、ロールプレイ体験をしたりしながら研修を進める。遠隔教育の必要性について知り、教員間で共通理解を図ることができる。研修段階「いの段」「ろの段」については、研修動画を視聴することにより、研修を終えることができる仕立てとしているため集合研修だけでなく、個別研修で利用することも可能である。

① 特徴1「スモールステップで学びやすい研修」

研修段階は、「いの段」「ろの段」「はの段」の3つの段階に分け、学校の実態に応じて選択できるようにした。

ア 段階1「いの段」（イメージしよう!）の概要

「いの段」の研修動画では、国や県の資料、実態調査アンケートの結果から、遠隔教育の背景や現状を知ることができる。また、「えんかくいろは」の使い方や活用場面を知ることができる。視聴後、参

加者は遠隔授業についてのイメージを持つことができ、「ろの段」への円滑な導入を見込んでいる。

イ 段階2「ろの段」（ロールプレイ体験をしよう!）の概要

教員がグループになり、ロールプレイ体験を行う。遠隔授業で起こり得る出来事への対応策や遠隔授業を実施する際の工夫を考えたり、話し合ったりする「ミッション」に取り組む。「ミッション」に取り組んだ後、「えんかく事典」の解説動画を視聴することで教員の情報活用能力を高め、遠隔授業にスムーズに取り組めるようになることを目標とする。

ウ 段階3「はの段」（発表・共有しよう!）の概要

「ろの段」で体験した内容を基に、各グループで話し合った考えやアイディアを発表・共有し、教員間の共通理解を図る。発表前の話し合いでは、自校の児童生徒への支援を考える視点を取り入れることで、学校現場での具体的な場面について考える機会とする。

② 特徴2「短時間で気軽に楽しい研修会」

「ろの段」で取り組むミッションを、くじ引き（えんかくじ）で決定することで、研修にエンターテインメント性を持たせ、参加者の興味関心を高める。また、遠隔授業が突然必要になった時の困り感を体験させ、参加者に課題意識を持たせる。

③ 特徴3「負担が少ない研修会」

「研修いろは」では、どの研修段階においても動画による進行で、研修を行うことができる。このことで、集合研修を行う際の研修担当の負担軽減や個別研修への対応が可能になる。また、参加者の持ち物はタブレット端末だけでよいため、手軽に参加することができる。

7 実践研究

(1) 教員研修会

表3に示す学校で教員研修会を実施した。

表3 研修会の対象

実践校	対象	実施日
利府町立利府小学校	教員（20名）	10月24日
宮城県松島高等学校	教員（26名）	11月27日
石巻市立河南東中学校	教員（21名）	12月10日

① 目的

「えんかくいろは」が、同時双方向型遠隔授業を推進するための支援手法として有効であるかを検証する。

② 内容

教員研修会は、「研修いろは」の手順に沿って進めた。教員研修会を実施した3校では、集合研修で行った。「いの段」では、PR動画を再生し、遠隔

授業についての背景や現状、必要性を示した。「ろの段」では、教員をグループに分け、「えんかくじ」を使ったロールプレイ体験を実施した。「はの段」では、ロールプレイ体験を振り返り、学んだことや感じたことを発表・共有し、教員間の共通理解を図った。

③ 調査方法

教員研修会後のオンラインアンケートフォームによるアンケート調査

④ 調査結果

ア 研究の目標に関する調査項目

「(1) 研修会を通じて、遠隔教育の必要性を理解することができましたか」「(2) 研修会を通じて、遠隔授業に必要な知識や技術を知ることができましたか」という質問に対して、「できた」「どちらかといえばできた」の肯定的回答はどちらも 100%であった（図7、図8）。

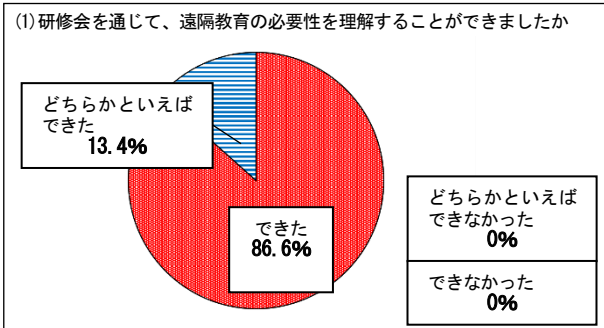


図7 研究の目標に関する項目（回答数 n=67）

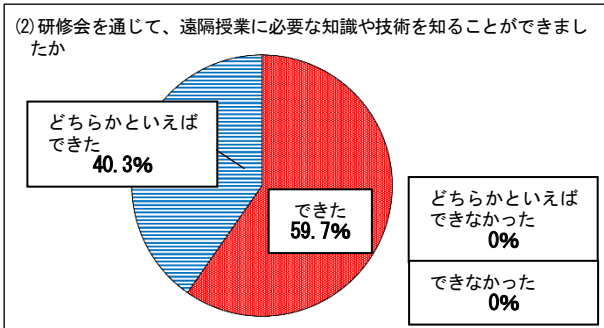


図8 研究の目標に関する項目（回答数 n=67）

また、アンケートの自由記述には「短い時間で遠隔授業の必要性を感じることができた」「ICTは苦手だと感じていたが、意外とできそうかと思うことができた」等の記載が確認できた。

このことから、本研究の目標である「短時間で遠隔授業の必要性について教員間の共通理解を図ることができる」「短時間で同時双方向型遠隔授業に必要な知識や技術を知ることができる」について、「研修いろは」の有効性を確認することができた。

イ 研修会や動画の時間に関する調査項目

「(1) 今回の研修会の時間は長いと感じましたか」「(2) えんかく事典の動画の時間は長いと感じましたか」という質問に対して、「適切だった」という回答は、どちらも 89.6%であった（図9）。

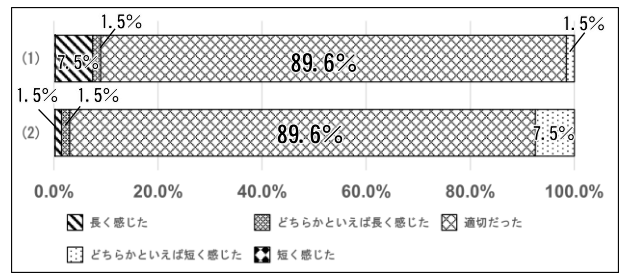


図9 研修や動画の時間に関する項目（回答数 n=67）*1

ウ 研究成果物（えんかく事典）に関する調査項目

「(1) 自身の授業での具体的な活用の場面をイメージすることができましたか」では、「できた」もしくは「どちらかといえばできた」の肯定的回答が 97%であった（図10）。

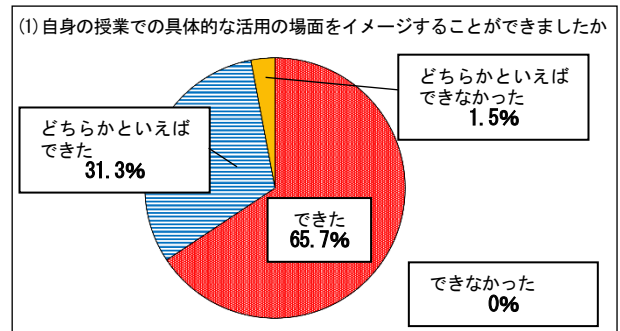


図10 えんかく事典に関する項目(1)（回答数 n=67）

「(2) えんかく事典の動画終盤にある『今日のまとめ』は分かりやすかったですか」では肯定的回答が 98.5%であった（図11）。

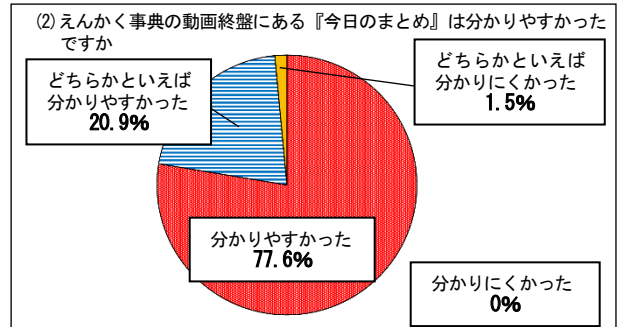


図11 えんかく事典に関する項目(2)（回答数 n=67）

アンケートの自由記述には「動画が分かりやすいので、実際に児童生徒に見せて使い方を教員と共有することができそうと思った」「動画がすっきりと分かりやすく、小学校低学年でも理解できる」等の記載があった。このことから、えんかく事典は、学校現場の教員や児童生徒にとって、分かりやすく利用しやすいものに仕上がっていることを確認することができた。

エ 研究成果物（研修いろは）に関する調査項目

「(1) 研修会の流れは分かりやすかったですか」では、肯定的回答が 100%であった（図12）。

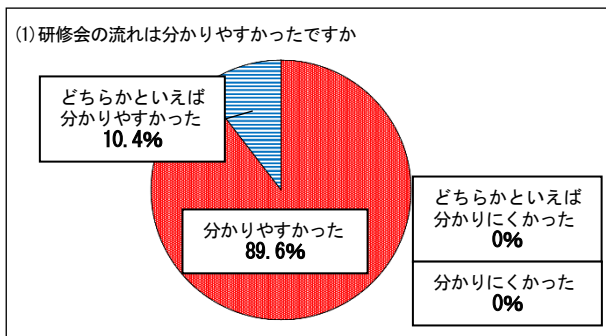


図12 研修いろはに関する項目(1)（回答数 n=67）

「(2) あなたが、この研修会の運営や進行をする場合、今回の研修動画は使いやすいと感じましたか」では、肯定的回答が98.5%であった（図13）。

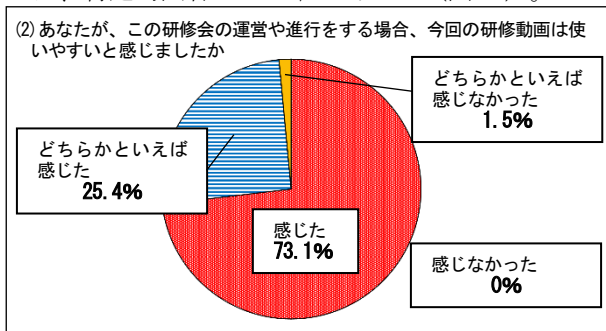


図13 研修いろはに関する項目(2)（回答数 n=67）

アンケートの自由記述には「初期の不安がある段階では、一歩踏み出すきっかけになる研修だったと感じた」「とても分かりやすく、最後まで研修したいと感じた」等の記載があった。肯定的な意見が多く、研修いろはの内容が妥当であることを確認できた。

⑤ 「えんかくいろは」の改善

教員研修会後のアンケートでは、すべての項目で肯定的な回答を得ることができ、研究の方向性が適切であることが確認できた。また、研修で紹介した動画以外にも、「接続が切れた児童生徒に対応したい」「児童生徒がオンライン会議システムを初めて使うときに伝えること」などの動画があるとよいという意見があった。学校現場の声を取り入れながら、研修方法や作成した動画の内容について改善した。

8 おわりに

以上のことから、本研究の成果と課題を次の3つにまとめる。

(1) 「えんかくいろは」の有効性について

教員研修会後のアンケート調査では、研究の目標や、研究成果物の内容、研修会の時間などの質問項目において、肯定的な回答を得ることができた。このことから「えんかくいろは」は、同時双方向型遠隔授業を推進するための支援手法として、有効であることが明らかになった。

(2) 「えんかくいろは」の活用場面について

「えんかく事典」の特徴で「同時双方向型遠隔授業を成立させるためには、児童生徒や、サポートする保護者が遠隔授業に関する知識や技術を知る必要がある。そのため、動画は児童生徒の目線で作成することで、教員が授業などで活用するだけでなく、児童生徒や保護者が家庭で視聴し、遠隔授業に必要な知識や技術などを知ることができる」としていたが、今年度は、児童生徒や保護者が「えんかく事典」を視聴する機会を設定できなかった。今後、児童生徒、保護者に「えんかく事典」を活用してもらうための具体的な手立てを模索していく必要がある。

(3) 「えんかくいろは」の普及について

本研究で教員研修を実施した学校は3校のみだったため、研究主題にある同時双方向型遠隔授業を推進するための支援としては、十分だったとは言えない。宮城県内の学校に同時双方向型遠隔授業を広げていくために、次年度の課題解決研修において、教員研修会の実施や Web ページでの発信を通して更なる普及を目指していく。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省 (2024) 「義務教育段階における質の高い教育の実現に向けた遠隔教育の活用について（通知）」
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会 (2023) 「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」
- 3) 遠隔教育の推進に向けたタスクフォース (2018) 「遠隔教育の推進に向けた施策方針」
- 4) 文部科学省 (2021) 「感染症や災害の発生等の非常時にやむを得ず学校に登校できない児童生徒の学習指導について（通知）」
- 5) 文部科学省 (2024) 「高等学校等における多様な学習ニーズに対応した柔軟で質の高い学びの実現について（通知）」
- 6) 文部科学省 (2024) 「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」
- 7) 宮城県・宮城県教育委員会 (2024) 「第2期宮城県教育振興基本計画（改訂版）～志を育み、明るい未来の創造～」
- 8) 文部科学省 (2021) 「遠隔教育システム活用ガイドブック第3版」

【注釈】

*1 調査結果の割合は小数点第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない場合がある。

令和6年度 教育の情報化研究グループ

利府町立利府小学校
宮城県松島高等学校
情報教育班東 洋太郎
尾 形 祥平
氏 家 裕石巻市立河南東中学校 佐々木 博 史
齋 藤 秀 峰
千 坂 大 輔

背景

国や宮城県の資料から

国では

- 距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやりとりができる(双方向性を有する)遠隔教育の強みを生かし、継続して推進すべき
- 平常時から非常時を想定した備えをしておくことが重要
- 児童生徒がやむを得ず学校に登校できない場合などには、**同時双方向型のウェブ会議システムを活用する**

高等学校等

- 令和6年4月より遠隔授業や通信教育による単位認定を36単位まで修得が可能とする

義務教育

- オンラインの活用は、学びの幅を広げることや、**学習機会の確保**を図るという観点から重要な役割を果たしている

宮城県では

- 誰もが自分らしく学び、一人一人の可能性を広げる「教育DXの推進」

現状と課題

宮城県の教員のアンケートから

遠隔授業をどのような形式で実施しましたか。(n=380)

同時双方向型での実施…19.7%

同時双方向型の遠隔授業ができていない

遠隔授業を実施する上で課題となることは何だと考えますか。(n=380)

教員の業務が多忙であること…71.8%

教員の情報活用能力が低いこと…56.1%

教員が多忙である 教員の情報活用能力が低い

遠隔授業に期待することは何ですか。(n=380)

個々の児童生徒の状況に応じた遠隔教育…72.6%

家庭学習を支援する遠隔オンライン学習…62.1%

遠隔授業への期待

国や宮城県の資料・現状と課題から

背景から

現状と課題から

教育の機会均等や質の向上・維持

平常時から非常時を想定した備え

遠隔授業への期待

遠隔教育の必要性の理解

同時双方向型ウェブ会議システムの活用

同時双方向型遠隔授業ができていない

多忙である、教員の情報活用能力が低い

同時双方向型遠隔授業ができる

目指す教員の姿：遠隔教育の必要性を理解し、必要なときに同時双方向型遠隔授業ができること

研究の目標

同時双方向型遠隔授業を推進するための支援手法の確立

視点①

短時間で遠隔教育の必要性について
教員間の共通理解を図ることができる

視点②

短時間で同時双方向型遠隔授業に
必要な知識や技術を知ることができる

遠隔授業推進パッケージ「えんかくいろは」の研究開発

遠隔授業の「知りたいこと」が分かる！

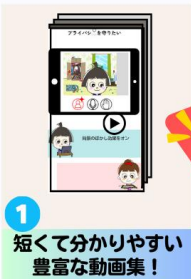
遠隔授業の「成功の扉」を開く！

えんかく事典

えんかく事典とは？

遠隔授業で使える「なるほど！」の知識や
技術がいっぱい♪
困った時に頼りになる便利な事典だよ！

えんかく事典の特徴

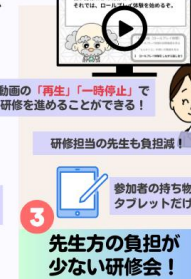


研修いろは

研修いろはとは？

遠隔授業で起こり得る出来事を
体験することができる研修セット♪
普段から万が一にも備えることができるわ♪

研修いろはの特徴



検証と成果

教員研修事後アンケート調査から、肯定的に回答した教員の割合

えんかく辞典に関する項目(n=67)

- (1)授業での具体的な活用の場面をイメージできた **97.0%**
(2)えんかく事典の動画にある「今日のまとめ」は分かりやすかった **98.5%**

研究の目標に関する項目(n=67)

- (1)遠隔教育の必要性を理解することができた **100%**
(2)遠隔授業に必要な知識や技術を知ることができた **100%**

研修いろはに関する項目(n=67)

- (1)研修会の流れは分かりやすかった **100%**
(2)研修会の運営や進行をする場合、研修動画は使いやすいと感じた **98.5%**

自由記述より一部抜粋

- ・動画が分かりやすく、実際に児童生徒に見せて使い方を教員と共有することができそう。
- ・同時双方向となると、分からないことが多いので、えんかく事典はとても活用できそう。
- ・動画は、すっきり分かりやすく、小学校低学年でも理解できると感じた。
- ・遠隔授業に対して第一歩を踏み出すことができる教材だと思った。

遠隔授業推進パッケージ「えんかくいろは」は、教員が遠隔教育の必要性を理解し、同時双方向型遠隔授業に必要な知識や技術を知るための手段として、有効なパッケージであることを確認することができた